# 『道信集』人物考

## ――「右近中将信賢」と「権少将」について――

妹尾好信

### はじめに

藤原道信は、わずか二十三歳で夭折したが、『拾遺集』以下の勅撰集に四十八首もの歌が採られ、中古三十六歌仙の一人にも数えられた有名歌人である。その家集『道信集』は、現在二類四種八伝本の存在が知られる。いずれも他撰ではあるが、情熱的な恋歌をはじめ、当時の貴顕や男女の歌よみたちと交わされた多くの贈答歌を含んでいて、貴重である。例えば『日本古典文学大辞典』(岩波書店)の「藤原道信」の項(杉谷寿郎氏執筆)には、「花山天皇女御であった婉子や藤原済時女・小大君・小弁ほかへの恋歌、藤原公任・同実方・源宣方・藤原成房・同為頼等との交遊の贈答歌が多く、また父為光および円融院への追悼歌が多いのも異色である」と、詠歌から知られる道信の華やかで多彩な交際圏が指摘されている。恋歌を交わした女性たちとの関係もむろん興味深いが、本稿では、男性との交友の中で詠まれた歌に関して、若干の考察を加えてみたいと思う。

### 一　「右近中将信賢」について

『道信集』(島原図書館松平文庫蔵本)に、次のような二首の歌が見える(引用は『私家集大成』中古1「道信1」による。以下同じ)。

一条とのゝふくなる秋ころ
(別本)このあきはむしよりほかのこゑならて　またとふ人もなくてこそふれ(一〇)

右近中将信賢
わかやとのつゆのうへにもしのふらむ　よのつねならぬあきの野かせに(一一)

「一条との」とは、道信の実父、藤原為光である。『拾芥抄』中巻・諸名所部第二十に、「一條院　一條南大宮東二町、謙徳公家、又為二法住寺大臣為光家一也」とあるように、為光は兄伊尹の邸宅であった一条殿を伝領し、後一条殿と呼ばれた。正暦三年(九九二)六月十六日薨、享年五十一。従って、「一条とのゝふくなる秋ころ」とは、同年七月から九月までの間をさすことになる。

一〇番歌は道信歌で、「今年の秋は、虫の声以外には訪ねてくれる人もなく、寂しい日々を過ごしていますよ」と言っている。上の句「むしよりほかのこゑならて」という言い方には少々疑問があるが、父の喪中の無聊を嘆く気持ちを詠んだものと解される。書陵部蔵甲本には、第三句「こゑなくて」とあり、「私の周りには虫以外の声はなくて」の意となって、ややわかりやすい。おそらくは、亡父の四

十九日も過ぎて、弔問の人も稀になった頃のことであろう。為光の四十九日法要は八月五日に行なわれている(『日本紀略』)から、八月十日前後の詠歌でもあろうか。

続く一一番歌は、「右近中将信賢」の詠で、詞書はないので、前歌の詞書をそのまま承けるものと考えられる。同じ時に同じ場で詠まれたということであろうが、道信の歌に応じて詠まれた返歌と見て差し支えないと思われる。「私の家の庭の草葉に置いた露の上でも、虫たちが亡き人(為光)を偲んで鳴いていることでしょう。普段とは全く違うこの秋の野風に吹かれながら」の意と思われ、第四句「よのつねならぬ」とは、喪中で例年とは異なる意に、無常の世の意を響かせているのではなかろうか。「わかやとのつゆのうへ」で偲んでいるのは、前の道信詠との関係から見て、秋の虫であろう。現在推量の「らむ」を用いているから、信賢はよそにいて自宅の庭の様子を推量している。道信邸に見舞に訪れて詠んだ歌なのであろう。

さて、この「右近中将信賢」であるが、この人物の素姓を知るには、少々煩雑な考証を要する。

道信と同時代に生きた「信賢」なる人物は、槇野廣造氏『平安人名辞典―長保二年―』(平五　高科書店)によると、長保二年(一〇〇〇)現在の生存者として次の五人が掲げられている。

①平　信賢　寛弘7(一〇一〇)・2・14、正六上、朝臣。大宰大監に任ず(「除大」)。

②藤原信賢　長徳3(九九七)・9・9、信賢朝臣(姓欠く)。重陽の作文の序者となる(「小右記」)。

(「拾遺集」三六九、康保三年(九六六)、内裏にて子日……藤原のふかた。とみえるにあたるか。「作者部類」は、五位左兵衛佐とする。また、「道信集」二二、右近中将信賢。とあるも同人か。)

③源　信賢　源信義の男。(経歴不詳)。子に、僧賢暹(一〇一九～一二三)がある(「系纂」)。(「分脈」源信頼につくる。)

④(姓不明)信賢　長徳3(九九七)・9・9、信賢朝臣。重陽作文の序を書す(「小右記」)。(藤原信賢のことか)

⑤(姓不明)信賢　寛仁元(一〇一七)・8・23、史信賢。申文三枚を奏す。寛仁3・正・14、御斎会結願に奉仕す(以上「小右記」)。同・8・11、史信賢。定考に献盃す(「左経記」)。同・10・14、信賢。内裏大垣修築の始まるを申す(「小右記」)。寛仁4(一〇二〇)・8・11、史信賢。定考に献盃す(「左経記」)。同・10・27、行□史信賢。陽明門の修理について云う。同・12・16、仁王会行事史信賢(以上「小右記」)とみえる。

このうち、②と④は、実は姓不明の同一人である。作文の序を書いているから、文章に秀でた文人であろう。⑤も申文を作成しているから文人であることは明白で、あるいはこれも同人かと思われる。ただ、②・④は「信賢朝臣」と呼ばれているので、四位か五位であったはずで、そうなると「史(書記官)信賢」と呼ばれるのはやや違和感があり、おそらく別人であろう。③の源信賢は博雅の孫で、管絃の家の出である。①の平信賢は出自不明だが、かなり卑官である。

『道信集』の一一番歌を詠んだ「信賢」は、②に付記されているごとく、『拾遺集』に歌を一首採られた「藤原のぶかた」と同一人物であろうか。巻五・賀・二八九に、次のようにある（引用は『新編国歌大観』による。以下同じ。『拾遺抄』の引用も同じ）。

康保三年、内裏にて子の日せさせ給ひけるに、殿上のをのこども和歌つかうまつりけるに　　藤原のぶかた

めづらしきちよのはじめの子の日にはまづけふをこそひくべかりけれ

この歌は、『拾遺抄』巻五・賀・一八五にも、次のように載る。

康保三年正月二日内裏にて子日せさせ給ひけるに殿上の人和歌つかうまつりけるに　　右兵衛佐藤原信賢

めづらしき千よのねのびのためしにはまづけふをこそひくべかりけれ

こちらは作者名を「右兵衛佐藤原信賢」と記している。『拾遺集』諸本を見ても、書陵部蔵堀河宰相具世筆本や北野天満宮本といった異本系統には「右兵衛佐藤原信賢」とある（片桐洋一氏『拾遺和歌集の研究』校本篇・伝本研究篇）。そして、この人を『勅撰作者部類』は次のように載せる（引用は『八代集全註』による）。

信賢　五位・左兵衛佐・豊前・先祖可尋

ここには「左兵衛佐」とあって、左右の相違はあるが、『拾遺抄』や異本系『拾遺集』の記す官職とほぼ一致している。また、「五位」とあるのは、②・④の「信賢朝臣」の呼称と合致する。「先祖可尋」とあるように系譜不明の人物とされているが、②・④の「信賢」がこの人物である可能性は少なくないように見える。

ところが、同じ『拾遺集』の巻二十・哀傷・一二八二に、次のような歌が存在する。

右兵衛佐のぶかたまかりかくれにけるに、おやのもとにつかはしける　　右大臣

ここにだにつれづれになく郭公ましてここひのもりはいかにぞ

「右兵衛佐のぶかた」が亡くなった時に、その親のもとへ右大臣藤原顕光が詠んでやった歌である（『拾遺集』の異本には、「信能」「信方」ともあるが、本来は「のぶかた」と仮名表記されていたものと見られる）。この「右兵衛佐のぶかた」は、その官職名から見て『拾遺抄』一八五番歌の「右兵衛佐藤原信賢」と同一人物であり、さらには『拾遺集』二八九番歌の「藤原のぶかた」とも同人と考えられる。

ところで、小町谷照彦氏は、『拾遺集』一二八二の「右兵衛佐のぶかた」を「藤原惟賢」とし、「左大臣源重信の子右近中将宣方とする説もあるが、伊尹集に、致仕大納言重光が、一条摂政藤原伊尹の次男惟賢の死に際して弔問した歌として収められているので、惟賢が正しいか」と言われる（「新日本古典文学大系」『拾遺和歌集』脚注）。

藤原伊尹の子惟賢は、『尊卑分脈』に「右兵衛佐　正五下」と記される。母は兄親賢と同じ代明親王女恵子女王とある。道信の母為光室の同腹の兄にあたる。「右兵衛佐」の官職名が一致しており、さらに、小町谷氏が指摘される通り、「ここにだに」の歌は『一条摂政御

集』（五二～五三）に次のような贈答として載っている（引用は「新日本古典文学大系」『平安私家集』による）。

のぶかたのきみうしなひたまたるに、ちじの大納言と、のちのよにはきこえし、しげみつのきみ

ここにだにつれづれとなくほととぎすましてここひのもりはいかにぞ（五二）

御かへし、なくなく

いかにぞととふにつけてもほととぎすもりのなげきをおもひやらなん（五三）

この「のぶかたのきみ」は伊尹息の惟賢に相違なく、「しげみつのきみ」とは、代明親王の長男で、惟賢には母方の伯父に当たる源重光である。これによると、惟賢は父伊尹の在世中に亡くなったことになる。『拾遺集』二八九番歌は、康保三年（九六六）春の詠であるから、伊尹在世中のことであり、その作者「藤原信賢」も実は惟賢である可能性が強い。一方、長徳三年（九九七）九月九日に作文の序を草した②・④の「信賢朝臣」は明らかに別人である。もちろん為光の喪中に歌を詠んだ『道信集』一一番歌の作者も惟賢ではありえない。

ここでその『道信集』に戻ると、一一番歌の作者は「右近中将信賢」とある。①～⑤の信賢にはいずれも「右近中将」の閲歴は確認できない。しかしながら、「信賢」の字を離れると、右近中将に任じた「のぶかた」は存在する。小町谷氏も言及されている源宣方である。宣方は左大臣源重信の男、母は左大臣源高明の女（『尊卑分脈』）。市川久氏編『近衛府補任』（平四　続群書類従完成会）によると、宣方は、永延元年（九八七、九月二十六日任カ）から正暦五年（九九四、九月八日止カ）まで右近少将、正暦五年（九九四、九月八日任）から長徳四年（九九八、八月二十三日カ）の卒時まで右近中将であった。

もっとも、宣方が右近中将になった正暦五年九月には、道信はすでに亡くなっており、一一番歌が詠まれた正暦三年の秋には右近少将であった。実は、『道信集』書陵部蔵甲本と桃園文庫本にはこの歌の詠者名が「右少将のふかた」とあり、「のふかた」と仮名表記であることもあって、この人物を源宣方と考えることに何の支障もない書き方になっている。これが本来の形かと思われる（同二本には、他本にない歌として、「いかなるをりにかのふかたの中将」と詞書する歌もある。これも宣方のことらしい）。松平文庫本や榊原本の「右近中将」は、もとは宣方の詠作時の官職名ではなく最終官職名で書かれていたものであり、平仮名表記されていた「のぶかた」に、『拾遺抄』や『拾遺集』異本の作者名「藤原信賢」に影響されて「信賢」の字が誤って宛てられたものと考えられる。

宣方と道信の間には、特に縁戚関係はないが、永延二年（九八八）二月から正暦二年（九九一）九月まで三年半にわたって同じ近衛府で左右の少将を勤めていたから、親しい交友があったと考えるのはごく自然であろう。二人は実方や公任とはともに親しく、彼らの家集にはしばしば両人の名が現われる。和歌や風流を愛する貴公子ということで、実方や公任らを交えて日ごろから親交を深めていたので

あろう。道信が実父為光を亡くして、悲しみに浸りながら寂しい喪中の日々を過ごしていたある秋の日、友を気遣った宣方が見舞いに訪れた。二人は庭にすだく虫の声を聞きつつ、道信の詠んだ歌に宣方が唱和した。そんなうるわしい友情のひとこまであろう。

宣方が「わがやどの露の上にも偲ぶらむ」と言っているのは、あるいは、宣方もこの頃、近親者を失っていたからかも知れない。彼の父源重信は、長徳元年(九九五)年五月八日に亡くなっている(『公卿補任』『日本紀略』)から、正暦三年(九九二)秋の時点ではまだ健在である。母の高明女の没年は明らかでない。ことによると、この母を亡くしたばかりであった可能性もあろう。『公任集』二三四には、「宣方の中将のぶくなる」頃、公任と宣方の間に交わされた贈答歌が載る。これは父重信の喪中の時のことと解されているが、公任、宣方、道信らは、互いに和歌で慰めあうような仲であったことが窺われよう。ちなみに、『実方集』二〇八には、「おば北の方の御服」の頃、実方が宣方に贈った歌が見えている。

## 二 「権少将」について

ところで、『道信集』には、次のような歌も見えている。

かくて、寺よりかへりて、よの中心ほそくなかめらる、むしのねもさま〳〵きこゆるゆふくれに、権少将のもとへ

こゑそふるむしよりほかにこのあきは　またとふ人もなくてこそふれ(四一)

詞書に「かくて」とあるのは、直前の次の贈答を受けた表現である。

ご殿の御物いみにてまたえいてぬに、花山院、御使にてお

ほせたまへる

おほかたになくむしのねもこのあきは　こゝろありてもおもほゆるかな(三九)

御返

あきはかりなくむしのねもあるものを　かきらぬこゑはきこゆらんやそ(四〇)

ここで言う「ご殿の御物いみ」というのも、父為光の喪中をさすと思われる。「またえいてぬ」とは、後の四一番歌の詞書から察するに、中陰の期間を過ごしている寺をまだ出ない頃ということである。この「寺」は、為光が自ら建立して菩提寺とした法住寺であろう(『栄花物語』巻四「見果てぬ夢」参照。為光の法事も同寺で行なわれた。『日本紀略』の正暦三年八月五日条には、為光の四十九日の法要が「法性寺」で行なわれたとあるが、「法住寺」の誤りであろう)。

寺籠り中の道信のもとに花山院から使いがあり、見舞の歌が贈られた。「普通に鳴いている虫の声も、今年の秋は特別に、亡き為光公を偲ぶ心が籠められているように思われますよ」という意で、花山院の為光追悼の思いが詠まれている。思えば、花山院は在位時代、為光の娘である弘徽殿の女御忯子をいたく寵愛していたが、懐妊中に死去してしまったことを大いに嘆き、それが退位・出家の原因ともなったのであった。為光の薨去を悼んで喪中の道信にわざわざ見

舞の使いを送ったのも、為光が低子の父であったからであろう。また、院は後年、為光の四の君に通うようになる。為光の娘には相当感心が強かったようである。道信は院の歌に答えて、「虫の声は所詮秋の間だけ鳴くものですが、亡き父を偲んで秋に限らず泣く私の声は聞こえておいでしょうか」と、激しい悲しみを訴えている。

さて、四一番歌である。道信は寺から帰宅したが、なお世の無常を感じて心細く、ついついもの思いにふけってしまう。庭にすだく虫の声もさまざまに聞こえるある夕暮れ、「権少将」のもとに歌を贈る。「父を偲んで泣く私の声に、声を添えて鳴く虫のほかに、喪中で寂しいこの秋は誰も訪ねてくれる人もなく、寂しい日々を過ごしています」との意で、喪中の寂しさを訴えて、暗に訪ねてくれることを期待した詠み方である。相手はかなり親しい人物であるらしい。

この「権少将」は、書陵部蔵甲本と桃園文庫本には「なりふさの少将」とあることから、藤原成房のことと考えられている(安藤太郎氏「道信集作歌年次考」『平安時代私家集歌人の研究』(昭五七　桜楓社)所収)。成房は藤原義懐の子。はじめ成周と称したが、長徳二年(九九六)六月十七日に成房と改名(『類聚符宣抄』)。ただし、成房は長徳四年(九九八)に十七歳で左少将に任官したと覚しく(『近衛府補任』)、道信の在世中には少将の官についていない(『栄花物語』巻四「見果てぬ夢」に、正暦二年二月の円融院葬送の折に「行成兵衛佐」が「一条摂政の御孫の成房の少将」に歌を贈った記事が見えるが、梅沢本の勘物に「今年非少将、長徳四年始任少将歟、可尋之」とあるごとく、成房の当時の官名ではないと見られる)。長保三年(一〇〇一)三月十八日、任右中将、元左少将(『権記』)。長保四年(一〇〇二)二月二日、従四位上左近権中将として二十一歳で出家した(『権記』『小右記目録』)。これらの史料から知りうる限り、成房には「権中将」の閲歴はあるが、「権少将」の閲歴は確認できない。従って、松平文庫本・榊原本の記す「権少将」を、書陵部蔵甲本等によって藤原成房のこととみなすには問題がある。ただし、書陵部蔵丙本には「権中将」とあり、これなら成房の最終官職に一致する。が、しかし、この四一番歌が詠まれた正暦三年(九九二)にはわずか十一歳であった成房が、二十一歳の道信と親交があったとは考え難い。書陵部蔵甲本等に「なりふさの少将」とあるのは、後人のさかしらによる注記が本文化したために生じた錯誤とでも考えられよう。

そこで、正暦三年時点での近衛少将在任者を前掲『近衛府補任』によって検すると、次のような人々が挙げられている。

左少将

従四下　藤原相尹　　八月廿八日止、転左馬頭

従五上　源　経房[二十四]　　伊与介

〃〃　藤原頼親[二十一]

従五上　藤原隆家[十四]　　八月廿八日任、元右兵衛権佐(後任藤原通任)

右少将

〃〃　源　宣方　　十月廿日(記配)(後一七三)左中将八歳

従五上　藤原登朝　　八月廿八日補五位蔵人、
従五下　源　明理　　五位蔵人

この七人の中で特に注目されるのは、源宣方である。宣方は先の一一番歌の詠者と目された人物である。宣方の少将が権官であったかどうかは不明だが、この「権少将」が宣方である可能性は小さくないであろう。

そこで、この四一番歌を改めて眺めると、一〇番の道信歌に酷似していることがわかる。両歌は下の句が全く一致しており、上の句が少し異なるだけである。その上の句も「このあきはむしよりほかのこゑならて」（一〇）と「こゑそふるむしよりほかにこのあきは」（四一）との違いであって、意味はほとんど変わらない。どうやら、一〇番歌と四一番歌は同一歌の異伝であるようである。

一〇番歌は「一条とのゝふくなる秋ころ」に道信によって詠まれ、「右近中将信賢」が一一番歌を唱和した。一方、この四一番歌は「こ殿の御物いみ」が終わって「寺よりかへ」った道信が「権少将」のもとに詠み贈った歌である。先の考証により「右近中将信賢」が実は源宣方であることが有力になった。そして、この「権少将」も宣方である可能性が大きいということになると、両者は、同一歌の詠作状況を別の形で伝えたものと考えられよう。すなわち、一一番歌は、宣方が道信のもとを訪れた際に詠まれ、宣方の唱和を得たというように伝えているのに対し、四一番歌は、道信が宣方のもとに詠み贈って訪問を促した歌であるように伝えているのである。これはおそらく、『道信集』編纂の際に収集された資料に、二通りの伝えが存在していたことによるものであろう。編者は、上の句が異なっているため同一歌であることに気が付かず、別々に載せてしまったのであろう。

松平文庫本・榊原本には、一〇番歌の詞書と和歌の頭に合点が付されて「如本」との注記がある。一〇七番歌の後に記された本奥書によると、「本云　合点者三位入道本歌也」とあるので、この歌は「三位入道本」なる本にあった歌で、もとの親本にはなかった歌らしい。合点が付された歌は集中この歌だけである。親本は一〇番歌と四一番歌の重複に気付き、詞書の簡略な一〇番歌を削除したのであろう。しかしながら、それでは一一番の「右近中将信賢」の歌が前後の歌と関連を持たず浮いてしまう。一〇番歌をのみ切り出した親本の処置は適切ではなかった。「三位入道本」のように二首を並べた形が本来であったと考えなければならないであろう。

ところで、『道信集』には、あと二箇所「権少将」の名が見えている。ひとつは、次のような歌で、各本に存在する。

すけゆきのあそむ、いつもになりてくたるに、権少将なともあり

あかすしてかくわかるゝにたよりあらは　いかにとたにもとひにをこせよ（五四）

藤原相如が出雲守になって赴任する際の餞別に詠まれた歌らしい（書陵部蔵甲本と桃園文庫本には「すけ行朝臣いつもになりて権中将のきみ宣旨たまふとて」とある。「宣旨たまふ」は「餞し給ふ」の誤と

思われ、これによると「権中将」が「すけ行」の餞別を主催したことになる）。相如の出雲守任官の年次は確認できないが、『栄花物語』巻四「見果てぬ夢」によると、長徳元年(九九五)時点で「出雲前司」と呼ばれている。これを信じるならば正暦元年(九九〇)頃までの任官ということになり(福井迪子氏は正暦二年頃とされる〈「藤原相如考」『一条朝文壇の研究』〈昭六二　桜楓社〉所収〉)、永延元年(九八七)に右近少将になった宣方の少将在任中と重なっている。この「権少将」も宣方のことと見て何ら差し支えない。

もうひとつは、次のような贈答歌である。

[illegible]　のみかとうせ給ひてのとし、法住寺につれ〳〵にこもりゐたるに、権少将のもとより

つねならはころものいろもいかてかは　はなのかたみ（たもと）もいかゝそむへき（五八）

返し

きをふみの中にいれてせんとう歌

これかいろにころもゝそめすなりぬれは　はなのかはよのつねならぬかたみともみよ（五九）

帝の名が消えてしまったようではっきりしないが、おそらくは安藤太郎氏の言われる通り(前掲「道信集作歌年次考」)、円融院をさすと考えられる。すると、その崩御は正暦二年(九九一)二月のことであり、やはり、宣方の少将在任中である。もっとも、書陵部蔵甲本と桃園文庫本には「つれ〳〵とこもりゐたるに権中将の本より」、書陵部蔵丙本には「いみのほと法住寺につれ〳〵とこもりゐたるに権中将のもとより」との詞書があり、帝が崩御した年とは書かれていない。前述のごとく、法住寺は道信の実父為光が建立した寺であるから、あたかも為光の喪中に籠っていた折のことのように見える。それなら、四一番歌と同時期の詠ということになるが、こちらは歌の内容から春のことであるらしい。為光の薨去は六月十六日なので、やはり春に崩御した円融院の時と見るのがふさわしかろう。法住寺の創建は永延二年(九八八)で、三月二十六日に円融院も列席して供養が行なわれている(『日本紀略』『扶桑略記』)。円融院ともゆかりのある寺であった。

そういうわけで、『道信集』に登場する「権少将」は、いずれの場合も源宣方のことと考えてよいと思われるのである。

## おわりに

以上、『道信集』の登場人物について、いささかの考証を加えてみたが、『公任集』や『実方集』にしばしば登場する源宣方が『道信集』にも何度か登場することを確認した。さらに『道信集』の編纂方法の一端をも垣間見ることができた。そこで、はじめに引いた『日本古典文学大辞典』の記事に、道信と交際のあった人物として源宣方の名を挙げられているのは実に慧眼であったが、併せて挙げられた藤原成房の名は省いた方がよいということになりそうである。

――せのお・よしのぶ、広島大学文学部助教授――